

山口県の通信制課程生徒の進路選択と自己意識

林 寛 子

要旨

現在、通信制課程の高校および生徒は増加傾向にある。1990年代以降、通信制課程においては、既存の高校教育の教育システムや教育方針を変える新しい教育の模索が行われている。通信制課程の実態を把握することは、入学者受け入れを見直す上において重要と考え、全日制課程との比較から通信制課程の進路選択を把握した。結果、通信制課程の生徒は、他者との比較の中で生じる能力アイデンティティの揺らぎや自己意識が高校卒業後の進路希望に影響せず、大人の勧め等の影響を受けながら「高等学校卒業」という目的に向けて自分が選択した学びを進めているようすが明らかになった。

キーワード

通信制課程、進路選択、能力アイデンティティ、自己意識

1 はじめに

近年、通信制課程の学校数、生徒数は増加傾向にある。増加傾向にはあるが、通信制課程に在籍する高校生の割合は全体の6.3%

(文部科学省学校基本調査,2020)であり、通信制課程の生徒はマイノリティに位置付けられる。

そうした中で、2022(令和4)年4月、山口県に3部制の定時制と通信制課程の単位制高校である山口県立山口松風館高等学校が開校する。これまで山口県内の公立高校に併設されていた定時制・通信制課程の募集を停止し、JR新山口駅在来線口から徒歩6分という好立地に新設された山口松風館高校にまとめた。現在、少子化、国際化、情報化など、社会情勢の急激な変化に伴い、生徒の興味・関心や進路希望、価値観の多様化に対応するために高校教育も改革が進められている。この流れの中で、山口松風館高校が誕生する。

高校教育の改革は高大接続改革の一つであ

る。高大接続改革とは、高校教育と大学教育をひとつながりのものとしてとらえ「高大接続教育」を進めるための取り組みで、大学教育改革と大学入試改革とともに行われた。

大学は大学入試改革の中で、知識の暗記・再生から学力の3要素、英語4技能等をこれからの時代に求められる新しい学力として重視する改革が求められた。また、入学者の受け入れに当たっては、多様な背景をもつ人に、多様な入試方法、多様な評価尺度で大学入試を実施することが求められている。中央教育審議会の答申「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」(2018年)では、「今後、高等教育機関は、18歳で入学する日本人(18歳入学者)を主な対象として想定するという従来のモデルから脱却し、社会人や留学生を積極的に受け入れる体質転換を進める必要がある。」と示され、多様な背景をもつ人について、具体的に社会人や留学生が挙げられている。しかし、多様な背景をもつ者

はこれだけではない。山口大学の現在の入学者モデルは日本人の「全日制普通科新卒者」

(2021, 林)であり、山口大学においてはこのモデル以外が多様な背景をもつ者と言える。

通信制課程の在籍者は現在、少子化の中にあっても増加傾向にある。増加傾向にある理由は、これまでの高校教育におさまらない価値や経験をもつ生徒の増加である。例えば、不登校経験者もこの一例と言えるが、それだけではなく、海外に留学しながら日本の高校卒業資格を取得しようとする者、芸能活動を行う者、早くから国際舞台等で活躍する、あるいは活躍を目指すアスリート、eスポーツ業界で活躍しようとする者等がいる。1990年代以降、新設される通信制課程の設置目的は既存の高校教育の教育システムや教育方針を変える新しい教育の模索(林,2022)と言える。

全日制課程とは異なる通信制課程の実態を把握することは、従来のモデルから脱却する手がかりとなるであろう。そこで、本稿は通信制課程に焦点をあて通信制課程の実態を把握するとともに、全日制課程との比較から通信制課程の進路選択を把握し、山口大学の入学者受け入れに資することを目的とする。

2 メリトクラシーの再帰性と能力アイデンティティ

若者は自分がやりたいことを自由に選択できるかのような言説があるが、進路選択における現実には、どのような学校を出たのか、親との関係、社会階層等、自由な選択を阻む阻害要因が多く存在する。藤田は、「日本の高校は階層構造をなしており、各高校がトラックとして機能している」と指摘し、「トラッキングが法制的に生徒の進路を限定することはないにしても、実質的にはどのコース(学校)に入るかによってその後の進路選択の機会と範囲が限定される」(藤田,1980:18)と説明している。

教育機会や選抜に関する研究では、メリトクラシー(業績主義・能力主義)の概念を用いて説明されることが多い。メリトクラシーとは、社会的出自によって地位が決定された前近代社会から、人々を個人の業績に応じて選抜し、様々な地位に割り当てていくことを可能とする価値観が支配的となった近代社会への転換(中村,2011:5)によってもたらされた概念である。

日本の大学入試は、メリトクラシーを是として制度化されている。大学入試は能力を基準にして入試を行うが、常にその基準は正しかったのかという疑念が生じ、常に改善が必要になる。中村は、メリトクラシーは事あるごとに再帰的に振り返って多様な基準から問い直される性質を本来的に持っていると説明し、「メリトクラシーの再帰性」の概念を提起している。

そして、近年の「新しい学力」をめぐる議論は、かつての能力観を否定し、「新しい学力」を求める動きであり、後期近代における再帰性の高まりによるものと説明している。また、メリトクラシーの再帰性が高まった社会では、同時に自己の能力がいかほどのものであるのかということが常に問われ続ける社会でもあり、この能力アイデンティティを備えることができているかもしれないという、能力不安に苛まれる傾向が生じると説明している(中村,2009,2011,2018)。

つまり、中学、高校段階の学業成績は、他者との比較の中で自己の評価をもたらし、能力アイデンティティとなって大学進学志望を強く規定することになる。そこで、本稿では、能力アイデンティティに着目して、通信制課程の高校生の進路選択について全日制課程の高校生との比較研究を行う。

3 山口県の通信制課程の状況

3.1 山口県の通信制課程の高校

令和3年度現在、山口県には通信制課程を

設置している高校（表1）は7校である。そのうち5校は全日制課程と通信制課程を併設する狭域制の通信制課程である。残り2校は、

表1 山口県の通信制課程の高校

広域性・狭域性の別	公私の別	高校名	設置年
狭域制	公立	山口高等学校	S23(1948)年4月
狭域制	私立	誠英高等学校	H15(2003)年4月
狭域制	私立	聖光高等学校	H15(2003)年4月
狭域制	私立	長門高等学校	H19(2007)年10月
狭域制	私立	成進高等学校	H19(2007)年10月
広域制	私立	精華学園高等学校	H21(2009)年7月
広域制	私立	松陰高等学校	H23(2011)年1月

表2 高等学校の生徒数の推移

年度	全日制		定時制		通信制		合計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
S60(1985)	5,037,537	94.9	140,144	2.6	132,644	2.5	5,310,325	100
H2(1990)	5,476,635	94.8	146,701	2.5	153,983	2.7	5,777,319	100
H7(1995)	4,617,614	94.6	107,331	2.2	153,983	3.2	4,878,928	100
H12(2000)	4,056,112	93.3	109,322	2.5	181,877	4.2	4,347,311	100
H17(2005)	3,494,770	92.2	110,472	2.9	183,518	4.8	3,788,760	100
H22(2010)	3,252,457	91.5	116,236	3.3	187,538	5.3	3,556,231	100
H27(2015)	3,221,781	92.1	97,333	2.8	180,393	5.2	3,499,507	100
R2(2020)	3,012,708	91.3	79,356	2.4	206,948	6.3	3,299,012	100

表3 通信制課程生徒数

区分	公立	私立	合計	
全国	H30年度	57,285	129,217	186,502
	R元年度	56,373	141,323	197,696
	R2年度	55,427	151,521	206,948
山口県	H30年度	976	1,908	2,884
	R元年度	915	2,124	3,039
	R2年度	890	2,339	3,229

表4 通信制課程入学者数

区分	全体		公立		私立					
	入学者 (5月1日現在)	年度途中 入学者	入学者 (年度間)	年度途中 入学者	入学者 (年度間)	年度途中 入学者				
全国	平成30年度	50,820	22,865	73,685	11,046	2,207	13,253	39,774	20,658	60,432
	令和元年度	57,451	23,339	80,790	12,133	1,946	14,079	45,318	21,393	66,711
	令和2年度	58,718	21,411	80,129	11,423	1,640	13,063	47,295	19,771	67,066
山口県	平成30年度	686	389	1,075	121	26	147	565	363	928
	令和元年度	786	214	1,000	139	22	161	647	192	839
	令和2年度	892	427	1,319	154	44	198	738	383	1,121

表5 通信制課程年度間退学者数

	年度	公立	私立	合計	中途退学率
全国	H30年度	4,669	7,526	12,195	6.5
	R元年度	4,946	7,623	12,569	6.4
	R2年度	4,350	5,870	10,220	4.9
山口県	H30年度	19	119	138	4.8
	R元年度	9	108	117	3.8
	R2年度	15	107	122	3.8

表6 通信制課程卒業者の進路状況

区分	卒業者数	大学等進学者		専修学校(専門課程)進学者		就職者		進学も就職もしていない者		
		人数	卒業者に占める進学者の割合	人数	卒業者に占める進学者の割合	人数	卒業者に占める就職者の割合	人数	卒業者に占める進学や就職もしていない者の割合	
全国	平成30年度	56,283	10,104	18.0	12,212	21.7	11,026	19.6	21,070	37.4
	令和元年度	60,691	10,688	17.6	14,162	23.3	14,035	18.9	19,612	32.3
	令和2年度間	64,893	12,626	19.5	16,043	24.7	13,274	16.0	21,253	32.8
山口県	平成30年度	913	168	18.4	168	18.4	290	31.8	269	29.5
	令和元年度	1,055	203	19.2	241	22.8	320	29.3	275	26.1
	令和2年度間	1,049	170	16.2	239	22.8	296	27.2	326	28.2

※表2～表6は学校基本調査より筆者作成

通信制課程のみの独立校で、広域性の通信制課程の高校である。

通信制課程の生徒は、全国で増加傾向にある(表2)。山口県の通信制課程の在籍者数(表3)も全国同様、増加傾向にある。令和2年度の5月1日現在の在籍者は公立890人、私立2,339人、合計3,229人である。入学者数(表4)は令和2年度間で1,319人、そのうち427人が転編入となる年度途中入学者であった。ただし、この在籍者数、入学者数全てが山口県在住の生徒ではない。山口県に本校がある通信制課程に入学した生徒数である。

通信制課程に入学したものの退学する生徒もいる。令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果(文部科学省,2021)によると全日制、定時制、通信制課程全体の令和2年度の中途退学率は全国1.1%、山口県1.0%である。通信制課程のみの令和2年度の退学率(表5)は、全国4.9%、山口県3.8%であり、全日制課程と比較して高い傾向にある。山口県の通信制課程の退学率は全国退学率より低い状況にある。

通信制課程卒業者の進路状況(表6)は、山口県は卒業者に占める進学者の割合が令和2年度は16.2%である。全国と比較して、大きな違いが見られるのは就職者である。卒業者に占める就職者の割合は、令和2年度は27.2%で、全国よりも10%以上も上回る。ただし、山口県は、公立の全日制課程において

ても就職率が高い県であり、通信制課程の就職率が特別高いわけではない¹⁾。なお、通信制課程の卒業生には、進学も就職もしていない者が全国も山口県も3割程度いる。このことは、注目しておく必要がある。

3.2 山口県通信制課程の高校進路選択

山口県の通信制課程生徒の高校進路選択は、どのようなものであったのだろうか。山口県の全日制と通信制課程を併設する高校のうち調査協力を得られた3校に対して「高校生の進路選択と自己認識に関する調査」を行った。調査は2020年12月から2021年1月に、全日制課程は2年生、通信制課程はスクーリング²⁾に参加している生徒を対象に質問紙法調査で行った。調査内容は、高校選択、学習について、高校生活について、悩みについて、卒業後の進路について、自己についての意識、学歴意識についてである。調査校のうち2校は全日制、通信制課程ともに集合調査、残りの1校は全日制課程はホームルームで配布し、返送は郵送、通信制課程は配布・回収全て郵送法で行った。回収率は41.2%で、全日制課程44.1%、通信制課程41.2%（配付：全日制課程497 通信制352 合計849、回収：全日制課程219 通信制131 合計350）である。

回答者の年齢は表7のとおりである。通信制課程は、単位制のため学年というとらえ方がない。そのためスクーリングに参加している活動実績のある生徒を対象としていた。回答者の年齢を見ると、通信制課程は全日制課程の1年から3年の年齢にあたる15歳から18歳であり、20歳以上の生徒はほとんどいない。

転編入の経験（図1）の有無を確認したところ、通信制課程の生徒のうち62.3%が1校目であった。中学卒業後の進路先として通信制課程を選んでいる生徒が多い。転編入の経験があるのは、2校目と3校目以上の37.7%である。また、全日制課程においても4.1%の転編入経験者がいる。

表7 回答者の年齢

	全日制	通信制
15歳		13.7%
16歳	68.9%	30.5%
17歳	30.6%	30.5%
18歳	0.5%	20.6%
19歳		1.5%
20歳		1.5%
21歳以上		1.5%
合計	100.0%	100.0%

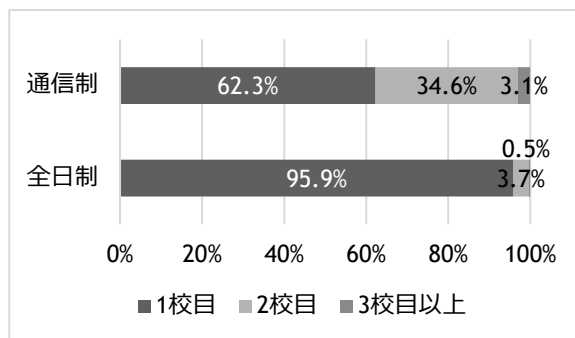


図1 転編入の経験

$\chi^2=66.101, df=2, p=0.000$

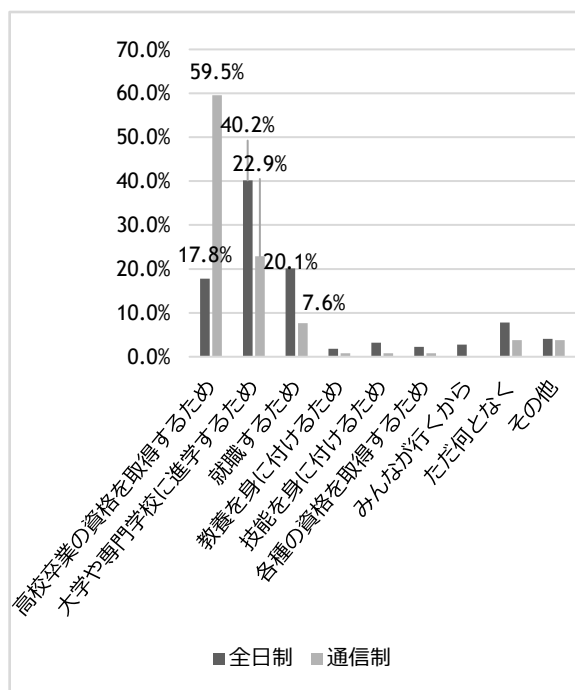


図2 高校進学理由

$\chi^2=67.727, df=8, p=0.000$

高校進学理由（図2）は、通信制課程は「高等学校卒業の資格を取得するため」が59.5%と高い。これに対して全日制課程は「大学や専門学校に進学するため」「就職す

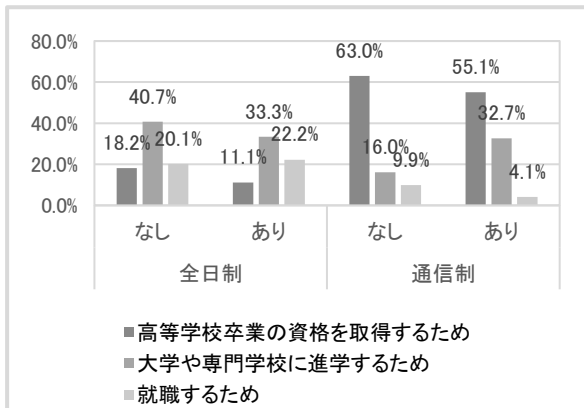


図3 課程別 転編入経験の有無と
高校進学理由

※ (転編入経験) あり
: 現在在籍している学校が2校目以上
(転編入経験) なし
: 現在在籍している学校が1校目

るため」の高校卒業後の進路を目的とした進学理由の割合が高い傾向にある。なお、進学理由のうち回答した割合が上位の項目3つを課程別に転編入経験の有無とクロス分析を行った(図3)。通信制課程で転編入経験ありの生徒は、「大学や専門学校に進学するため」の割合が転編入経験なしの者よりも高くなっている。通信制課程の転編入を経験するという形で非直線的な進路を辿った者にも大学進学を希望している者がいる。

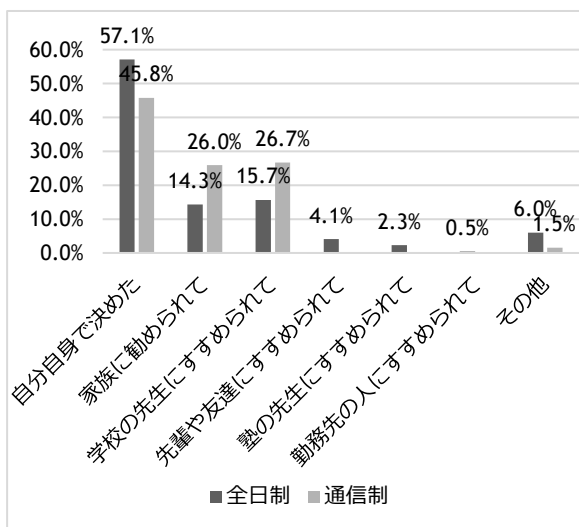


図4 進路決定時の他者の関与

$\chi^2=25.803, df=6, p=0.000$

在籍校への進路決定時の他者の関与(図4)は、通信制も全日制課程も「自分で決めた」という割合が高いが、通信制課程は、「家族に勧められて」「学校の先生に勧められて」決めた人の割合も高い。通信制課程を選択する場合には大人からの影響も大きいようである。

4 自己意識と進路選択

4.1 成績の自己認識

メリトクラシーの再帰性が高まった社会では、自己の能力がいかほどのものであるのかということが常に問われ続け、能力不安に苛まれる傾向が生じるということは、中学、高校段階の学業成績は、能力アイデンティティとなって大学進学志望を強く規定することになる。そこで、中学3年生の時の成績の自己認識と高校における現在の成績の自己認識の変化に注目し、能力アイデンティティをとらえる。

中学3年の時の能力アイデンティティ(成績の自己認識)、現在の高校における能力アイデンティティ(成績の自己認識)は、上位、中位の上、中位の中、中位の下、下位の選択肢で確認した。中学3年の能力アイデンティティは図5のとおりである。通信制課程は中学3年生の時の能力アイデンティティの意識が高い者の割合が全日制課程よりも低い。通信制課程への進路選択には中学時期の成績も関わっている可能性がある。

能力アイデンティティの変化を把握するために、中学3年の時と現在の成績の自己評価をそれぞれ、「上位」5点、「中位の上」4点、「中位の中」3点、「中位の下」2点、「下位」1点と得点化し、中学3年から現在の成績自己認識の変化を算出した。その結果、得点がプラスとなった者を「上昇」、得点が変わらなかった者を「変化なし」、得点がマイナスになった者を「下降」とし、通信制と全日制課程を比較した(図6)。能力アイデ

ンティティ（成績の自己認識）の変化は、全日制課程は「上昇」の割合が55.5%と高いのに対し、通信制課程は「上昇」は32.3%で、「変化なし」の割合の方が50.4%が高かった。成績の自己認識が「下降」ということは、能力アイデンティティに揺らぎが生じたと言える。「下降」は通信制課程も全日制課程も2割程度であった。通信制課程の生徒は自己の成績について低く評価したまま高校に進学し、高校教育を通して好転という変化は全日制課程より少ないようである。通信制課程は他者との比較の中で能力をとらえていないのかもしれない。今後の検証課題としたい。

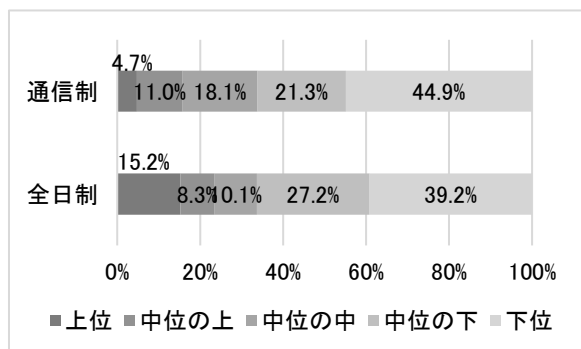


図5 中学3年の能力アイデンティティ（成績の自己認識）
 $\chi^2=14.058, df=4, p=0.007$

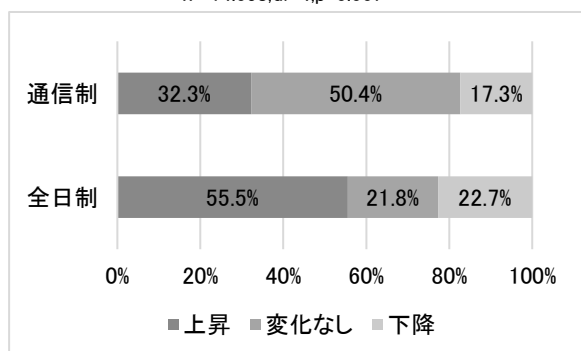


図6 能力アイデンティティ（成績の自己認識）の変化
 $\chi^2=30.602, df=2, p=0.000$

次に、課程別に成績の自己認識の変化と高校卒業後の進路希望とのクロス分析（図7）を行った。全日制課程においては、成績の自己認識の変化が「下降」したと認識した者は

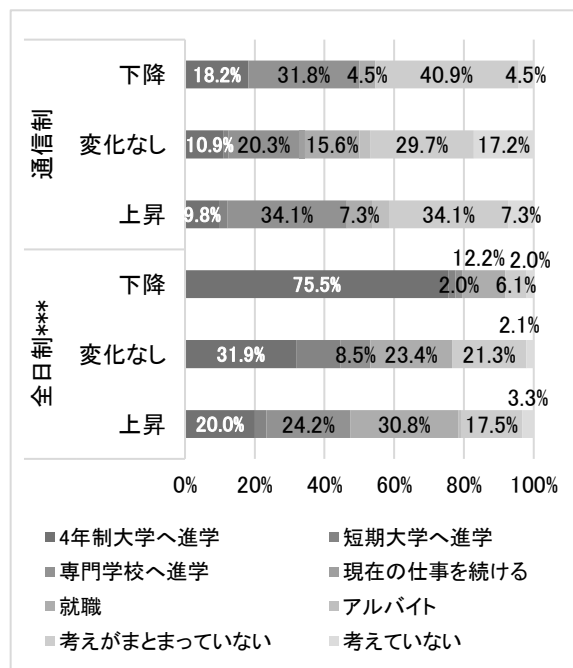


図7 課程別 能力アイデンティティ（成績の自己認識）の変化と高校卒業後の進路希望
 全日制 : $\chi^2=60.530, df=12, p=0.000$

ど4年制大学、短期大学、専門学校への学歴上昇を目指している。通信制課程は、優位な差は見られなかったが、通信制課程の成績の自己認識が「下降」した生徒は、進学を希望する者もいるが、「考えがまとまらない」者の割合が高くなっている。

4.2 能力・学歴に対する意識

通信制課程の高校進路選択理由が、高校卒業という学歴を重視した理由の割合が高いため、能力・学歴に対する意識の差が課程の違いによってあるのではないかと考え、能力・学歴に対する意識の課程別分析を試みた。

能力・学歴に対する意識に関する9項目について4段階で評価を求め、「そう思う」4点、「ややそう思う」3点、「あまりそう思わない」2点、「そう思わない」1点と点化し、因子分析を行った。その結果（表8）、能力・学歴に対する意識について3つの因子が抽出された。その抽出された第1因子を「学歴重視」、第2因子を「人脈・運重視」、第3因子を「才能・努力重視」と名付けた。

表 8 能力・学歴に対する意識の因子付加量
(回転後の因子パターン)

	因子		
	第1因子	第2因子	第3因子
	学歴重視	人脈・運重視	才能・努力重視
どんな学校を出たかで人生が決まってしまう	0.752	0.003	-0.096
どんな家柄が育ちかで人生が決まってしまう	0.487	0.184	0.001
職を得るためには学歴が必要だ	0.423	0.230	0.180
学歴は本人の実力をかなり反映している	0.360	0.053	0.360
成功するためには人脈が大切だ	0.028	0.494	0.094
お金持ちや地位の高い人が得をする	0.451	0.492	-0.142
成功は運やチャンスによって決まる	0.300	0.396	0.020
まじめに努力をすれば報われる	-0.083	-0.088	0.585
才能があれば十分に活躍できる	0.042	0.293	0.500
累積寄与率	19.832	28.784	33.682

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

a. 5 回の反復で回転が収束しました。

表 9 能力・学歴に対する意識
3 因子の課程別比較

		度数	平均値	F 値	有意確率
学歴重視	全日制	218	0.03	0.945	0.332
	通信制	124	-0.06		
	合計	342	0.00		
人脈・運重視	全日制	218	-0.05	2.704	0.101
	通信制	124	0.08		
	合計	342	0.00		
才能努力重視	全日制	218	0.03	1.351	0.246
	通信制	124	-0.06		
	合計	342	0.00		

そして、それぞれの因子得点について課程別に平均値の比較分析を行った。その結果、(表 9) は、全日制課程が学歴重視と才能・努力重視、通信制課程が人脈・運重視の傾向にあるようにも見えるが、有意な差は見られなかった。学歴に対する意識は、通信制課程も全日制課程も変わりはないと言える。

4.3 自己肯定と自己多元

先行研究において、高校生の段階においては自己肯定感が低い状態にある若者が多いことが明らかにされている(浅野,2006 など)。そこで、通信制課程生徒の自己肯定感と進路選択の関係の関係を明らかにするために、自己意識に関する 8 項目について 4 段階で評価を求め、「そう思う」4 点、「ややそう思う」3 点、「あまりそう思わない」2 点、「そう思わない」1 点と得点化し、因子分析を行った。その結果(表 10)、自己に関する 3 つの因子が抽出された。その抽出された第 1 因子を「自己肯定」、第 2 因子を「自己多元」、第 3 因子を「自己否定」と名付けた。

そして、それぞれの因子得点について課程別に平均値の比較分析を行った。その結果

(表 11)、「自己肯定」因子得点は、通信制課程と全日制課程の比較では有意な差は見られず、同程度であった。成績の自己認識別に「自己肯定」因子得点平均値を比較(表 12)したところ、成績の自己認識が低下した者は「自己肯定」が低い傾向にあった。全日制、通信制課程別の分析ではそれぞれ有意な差は認められなかった。

自己意識 3 因子の課程別平均値の比較(表 11)で有意な差が見られたのは、「自己多元」である。通信制課程の方が「自己多元」の平均点が高く、「状況によって本当の自分と偽りの自分を使い分けている」「自分がどんな人間かわからなくなる」といった自己の混乱の中にいる生徒の存在が見える。そこで、通信制課程の生徒のみで成績の自己認識別に「自己多元」因子得点の平均値を比較(表 13)したところ、能力評価の揺らぎが生じている「下降」の生徒の因子得点の平均値が高く、「自己多元」傾向にあった。

表 10 自己意識の因子付加量
(回転後の因子パターン)

	因子		
	第1因子	第2因子	第3因子
	自己肯定	自己多元	自己否定
本当の自分を見つけることが大切だと思う	0.695	-0.001	-0.005
本当の自分は一つだけしかないと思う	0.572	-0.205	-0.064
どんな場面でも自分を貫くことが大切だ	0.541	0.053	-0.037
人のもっていないものを身に付けたい	0.366	0.152	0.113
状況によって本当の自分と偽りの自分を使い分	-0.049	0.853	-0.036
自分がどんな人間かわからなくなる時がある	0.048	0.497	0.168
今の自分を変えたいと思う	0.266	0.192	0.749
今の自分が好きだ	0.295	-0.002	-0.460
累積寄与率	17.583	32.676	41.254

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

a. 4 回の反復で回転が収束しました。

表 11 自己意識 3 因子の課程別比較

		度数	平均値	F 値	有意確率
自己肯定	全日制	213	0.00	0.007	0.936
	通信制	126	0.01		
	合計	339	0.00		
自己多元	全日制	213	-0.09	6.045	0.014
	通信制	126	0.15		
	合計	339	0.00		
自己否定	全日制	213	0.02	0.411	0.522
	通信制	126	-0.03		
	合計	339	0.00		

表12 【通信制・全日制課程全体】
能力アイデンティティ（成績の自己認識）別「自己肯定」因子得点平均値

	度数	平均値	F 値	有意確率
上昇	157	0.095	4.004	0.019
変化なし	107	0.029		
下降	70	-0.239		
合計	334	0.004		

また、通信制課程の生徒の卒業後の進路希望別に「自己多元」因子得点平均値の比較を行ったが、有意な差は見られなかった。全体での卒業後の進路希望別「自己多元」因子得点平均値の比較（表14）では、短大進学や就職を希望する者が「自己多元」傾向にあった。なお、「自己肯定」については高校卒業後の進路希望との関連は見られなかった。

通信制課程の生徒は「自己多元」の傾向が見られるが、そのことが進路選択に繋がる特徴にはなっていないと言える。

表13 【通信制課程のみ】
成績の自己認識別自己多元」
因子得点平均値

	度数	平均値	F 値	有意確率
上昇	40	0.076	5.444	0.005
変化なし	62	0.037		
下降	22	0.605		
合計	124	0.151		

表14 【通信制・全日制課程全体】
卒業後の進路希望別「自己多元」
因子得点平均値の比較

	度数	平均値	F 値	有意確率
4年制大学へ進学	92	0.120	2.267	0.029
短期大学へ進学	13	-0.188		
専門学校へ進学	67	0.118		
現在の仕事を続ける	1	0.605		
就職	66	-0.289		
アルバイト	4	0.252		
考えがまとまっていない	76	0.100		
考えていない	21	-0.318		
合計	340	0.000		

5 まとめ

以上の分析結果から、山口県の通信制課程の生徒は、他者との比較の中で生じる能力ア

イデンティティの揺らぎや自己肯定感が高校卒業後の進路希望に影響していなかった。先行研究で、若者の傾向として明らかにされている能力アイデンティティの揺らぎや自己肯定感の低さは認められるものの、これらが全日制課程の高校生では高校卒業後の進路選択に関連が見られるのに対して、通信制課程は関連が見られない。通信制課程は、中学以前の経験や自己認識が高校卒業後の進路選択の意識に既に影響している可能性が考えられ、引き続き検証を行う必要がある。

通信制課程の生徒の中にも、決して多くはないが大学進学を希望し努力している生徒がいる。通信制課程の生徒は、大人の勧め等の影響を受けながら、「高等学校卒業」という目的に向けて自分が選択した学びを進めている。その先の高校卒業後の進路選択の支援は、全日制課程と同様というわけにはいかないであろう。大学は、このような大学進学を希望する若者の道を阻まないように、通信制課程も含めて多様な背景を抱えた若者の実態を把握し、対応していく責務があると考えられる。

（アドミッションセンター 准教授）

【参考文献】

- (1) 浅野智彦, 2006, 『検証・若者の変貌 失われた10年の後に』, 勁草書房
- (2) 林寛子, 2021, 「山口大学の入学者モデルの検討—多様な入学者の受け入れを目指して—」『大学教育』第18号, 10-22
- (3) 林寛子, 2022, 「山口県の通信制高校の現状と課題」『やまぐち地域社会研究』, 20号
- (3) 藤田英典, 1980, 「進路選択のメカニズム」天野郁夫・山村健編『青年期の進路選択』有斐閣, 118
- (4) 文部科学省, 2018, 「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」, pp14

- https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt_koutou01-100006282_1.pdf
(2022年1月11日取得)
- (5) 文部科学省,2020,「高等学校通信教育の現状について」令和2年1月15日
https://www.mext.go.jp/kaigisiryo/content/20200114-mxt_koukou02-000004042_4.pdf (2022年1月11日取得)
- (6) 文部科学省,2021,令和2年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」および結果の概要
https://www.mext.go.jp/content/20211007-mxt_jidou01-100002753_1.pdf
https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf
(2022年1月11日取得)
- (7) 文部科学省学校基本調査,2004(平成16)年度～2021(令和3)年度
<https://www.e-stat.go.jp/stat-earch/files?page=1&toukei=00400001&tstat=00001011528> (2022年1月8日取得)
- (8) 中村高康,2009,「メリトクラシーの再帰性について—後期近代における『教育と選抜』に関する一考察—」,『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』35,207-226
- (9) 中村高康,2011,『大衆化とメリトクラシー 教育選抜をめぐる試験と推薦のパラドクス』,東京大学出版会
- (10) 中村高康,2018,『暴走する能力主義 教育と現代社会の病理』筑摩書房
- (11) 山口県教育委員会,2020,「県立高校再編整備計画令和3年度～令和6年度」
<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cmsdata/c/b/f/cbfde8eaf1b3412bd28b3f264c261938.pdf> (2022年1月11日取得)
- (12) 山口県教育委員会,2021,「令和3年3月公立高等学校等卒業生進路状況調査結果」
<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a50300/shinro/shinror3.html>
(2022.1.11取得)

【注】

- 1) 山口県は,「令和3年3月公立高等学校等卒業生進路状況調査結果」において,令和2年度卒業公立高校の卒業生の状況について全日制・定時制課程の大学進学率46.2%,就職率29.8%で,通信制課程の大学進学率14.4%,就職率は32.7%と公表している。
- 2) 通信制課程においては,毎日登校して授業参加するのではなく,添削指導(レポート)と面接指導(スクーリング),単位認定試験を受けることで単位修得が可能になっている。

付記

本研究は,日本学術振興会令和2年度～4年度科学研究費助成事業 基盤研究(C)「地方の通信制高校生徒の進路選択とメリトクラシーに関する研究」課題番号20K02560の助成を受けたものです。